

special
1

病気を抱えたり、身体が不自由な高齢者を 「独り」にしないための ペガサスの新しい挑戦

special
2

医療から、そして看護、介護から。
地域社会を支える人々。



「つばさ」
読者は最先端の医療現場において
最も優秀であったことを認め
「つばさ」を贈ります
NPO法人日本地域医療振興センター



Tsubasa

special
1



Pegasus

病気を抱えたり、 身体が不自由な高齢者を「独り」に しないためのペガサスの新しい挑戦

私たちペガサスはいま、より公益性の高い「社会医療法人」として地域社会への貢献をめざしています。

その中心となる社会的使命は、言うまでもなく救急・急性期を中心に地域医療を支えていくことにあります。具体的に言えば、増え続ける救急搬送に対応し、常に392の病床をフル稼働させることが求められています。そのことは、急性期を脱した患者さまにいち早く次のステージをご用意し、

最終的には在宅復帰を支援することへつながっています。

ペガサスでは以前から、患者さまの在宅療養を支援する手厚いネットワークを作ってきました。

しかし、医療・介護の制度改革が進むなか、どうしても医療と介護のミスマッチが生じてしまっています。

退院される患者さまのなかには、

「自宅に帰りたいけれども、さまざまな事情で帰れない」方がいらつしやるのも事実です。

そのミスマッチのニーズをすくい上げるためにどうすればいいだろうか。

ペガサスが着手した新しい試みが高齢者専用賃貸住宅「ペガサスロイヤルリゾート石津」であり、

さらに今秋には第二弾として、介護療養型老人保健施設「ペルセウス」のオープンが予定されています。

今回はペガサスロイヤルリゾート石津の開設を機に、

社会医療法人としてさらなる地域貢献を志向するペガサスの新たな挑戦を追いました。

退院後、どこでどんな生活を送りたいか。 患者さまにとってベストの選択を求めて。

馬場記念病院とベガサスリハビリテーション病院では、合わせて10名のMSW(医療福祉相談員)が在籍している。大きな病院でもMSWは数名以下というケースが多く、10名の配置は極めて稀である。どうしてこれほど多くのMSWを配置しているのか、まずはそこから話を進めていこう。

制度の〳はさまざま で 葛藤するMSW。

MSWは入院中の患者さまのご相談に応え、社会福祉の立場から援助していく専門家である。療養中の社会的問題や経済的な問題の解決、退院後の生活設計など、支援する内容は多岐にわたる。

「早い段階から患者さまの状況を把握し、ご本人やご家族にとっていちばんいい退院後の生活を模索しますが、さまざまな事情が絡み合い、悩むことも多いですね」と語るのは、MSWの寺内淳(馬場記念病院・医療福祉相談室副主任)である。

「たとえば、自宅に戻りたいけれど戻れない方もおられます。介護度が高く、ご家族で支えるのがむずかしいケースや、反対に介護度の低い「要支援」の患者さまでも、お独り暮らしの住まいに戻るのには不安という場合もあります。『要支援』では、『要介護』が入居条件となる特別養護老人ホーム(略称…特養)や介護老人保健施設(略称…老健)などへは入れません。また、有料老人ホームという手もありますが、予算的に無理があったり、空きがなかったりという状況が多々あります。医療・介護・福祉制度の〳はさまざまで、正直、ジレンマを感じることもありますね。一人でも多くの救急患者さまを受け入れるためには、より良い



カタチで、スムーズにご退院いただくことが重要です。…」。

「MSWの悩みは、ある意味、私たちペガサス全体の悩みでもあります」と語るのは、社会医療法人ペガサス・法人本部企画運営局長の田中恭子（馬場記念病院・事務部長）である。「この地域は高齢者の独居世帯も多く、退院後の在宅療養には多くの課題が残されています。もともと別の形で、法人内でサポートする仕組みを作れないだろうか、とずっと考えてきました」。

ペガサス初の 高齢者専用 賃貸住宅事業への参入。

退院後の生活を法人内でサポートできないか。そこから生まれたのが、ペガサス初の高齢者専用賃貸住宅（略称…高専賃）「ペガサスロイヤルリゾート石津」である。高専賃とは、高齢者、障がい者の方々は賃貸住宅への入居が困難なことが多く、そうした方々の入居を断らない

賃貸住宅で、2007年5月、医療法人による経営が解禁されたばかりである。

高齢者の暮らしを支える住宅・施設は、ほかに老健や有料老人ホーム、グループホームなどがある。なぜ、高専賃を選んだのだろうか。「それは、ひとこと言うと、高専賃がもっとも自由度の高い生活を提供でき、幅広いニーズに対応できるからです。高専賃はご高齢の方のみならず、障がいのある方、介護保険を使えない方でも入居できますし、賃貸契約

のもとで短期間の入居も可能です。その一方で、生活の自由やプライバシーを確保でき、ご高齢者の尊厳を守ることができます。退院後の選択肢として、大きな可能性を秘めていると

考えました」と田中は説明する。

病院や施設ではなく、「自由度の高い在宅生活」を提供する高専賃。ただし、単に住居を作るだけでは、ご高齢者の暮らしは支えられない。「もちろん、私たちの目的は単に住居という器を作ることではありません。その器に医師や看護師、介護福祉士、理学療法士、ケアマネジャーなど多様な職員の力を注ぎ込み、医療や介護を必要とする方々が、安心して暮らせる環境を整えていこうと考えました」。

そこには徹頭徹尾、社会医療法人ならではの視点が貫かれている。一般的な高専賃とは一線を画した「ペガサスの高専賃」ならではの挑戦が始まった。

医療・介護現場の課題

社会の超高齢化が進むなか、社会保障費用の適正化に向けて、さまざまな視点から改革が進められている。そのなかで医療においては、医療費の伸びの抑制、平均在院日数短縮に向けた取り組み、さらに、療養病床については、機能分担を推進する観点から、医療保険・介護保険両面においての見直し、そのうえでの体系的な再編が進められようとしている。また、リハビリテーションについても、今後は医療保険ではなく介護保険財源でより多くをカバーしていく方向へ向かっている。なお、平成21年度介護報酬はプラス改定となったものの、介護に携わる人材確保や処遇改善につながるかどうか、その見通しは不透明とも指摘されている。



退院後の「在宅」の新しい形、 「ペガサスロイヤルリゾート石津」。

平成21年4月、南海電鉄南海本線「石津川」駅から歩いて9分ほどの場所にオープンしたペガサスロイヤルリゾート石津。クリニック、デイサービスセンター、訪問看護ステーションを併設した新築のマンションでいま、ご高齢者の新しい暮らしが始まっている。

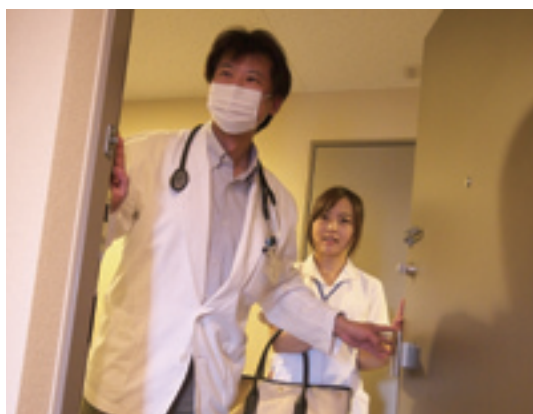
毎日のように 入居されている方々を 訪問診療する。

「こんにちは、中林です。お顔を見させてもらいましたね」。

ペガサスロイヤルリゾート石津の入居者宅を訪ねて歩くのは、同施設の管理責任者であり、併設されたペガサスロイヤルクリニックの院長・中林孝之医師と看護師である。

「調子はどうですか」。部屋に招き入れられた中林医師は、気さくに話しかける。「朝ごはん、何食べましたか。お薬、飲みました?」

中林医師の問いかけに、入居されている方にもこやかに応じる。顔色や



歩行の様子を観察し、血圧を測り、気になる症状を確認した後、「何かあったらすぐ、言ってくださいね」と声をかけ、中林医師は次の部屋へ向かった。

こうして一軒一軒訪ねていくうちに、中林医師の額には汗がにじんできた。湿度も温度も高い7月下旬のこと、「回診を終える頃には、汗だくになります」と笑う。入居者宅の訪問診療は義務的なものではなく、中林医師が率先して始めたことだ。「まずは、入居されている皆さまの健康管理が私の役目です。それぞれに病気を抱えているので、しっかりと診て、病状の急変をいち早く見つけなくてはなりません。そこで、診察のあるウィークデイはできるだけ各戸を回ることになりました」。こうした中林医師の取り組みは、入居者の方々すべてを大きな安心で包み込む。

「先生にはよく診ていただいて、あ

高齢者専用賃貸住宅とは

高専賃は、「高齢者の入居を拒まない『高齢者円滑入居賃貸住宅』のうち、専ら高齢者を賃借人とする賃貸住宅」を指し、国土交通省が管轄している。食事は宅配食、自炊、ヘルパーにより調理、外食などから自由に選択でき、介護は一般の住宅と同様、介護保険等の居宅サービスを利用する。集団生活の制限に縛られることなく、自由気ままに暮らせるのが、高専賃の利点でもある。

りがたいことです。離れて暮らす娘も安心しています」。住み慣れた自宅から移り住んだという80代の女性は、こんなふうにつて目を細めた。

「やっと家に帰れた」。
あきらめていた在宅を
実現したAさん。

中林医師がとくに注意深く見守っている入居者の一人に、Aさん（80代の男性）がいる。Aさんは数年前に脳梗塞を患い、馬場記念病院から馬場病院へ転院し、療養を続けていた。半身麻痺のため一人で座ることができない状態で、入院中はADL（日常生活動作）がかなり低かった。一日の大半をベッドで過ごすAさんは「要介護5」の認定を受けている。一般的に言えば、ご家族が在宅で介護するのはむずかしく、ましてや独り暮らしはどうしても無理だと判断されるだろう。

しかし、ペガサスロイヤルリゾート石津なら、医療介護の全面的なバックアップを受けられる。Aさんは、念願だった在宅生活を決意した。新築のワンルームに荷物を運び入れた日、Aさんはこんなふう職員に語ったという。「ずっと病院暮らしだとあきらめていたけれど、やっと

自分の家に帰ることができました」。その表情は明るく、目にはうつつすら涙が浮かんでいた。

居宅サービスを
利用しながら
安心して暮らしていく。

Aさんの日常生活は、多くの医療・

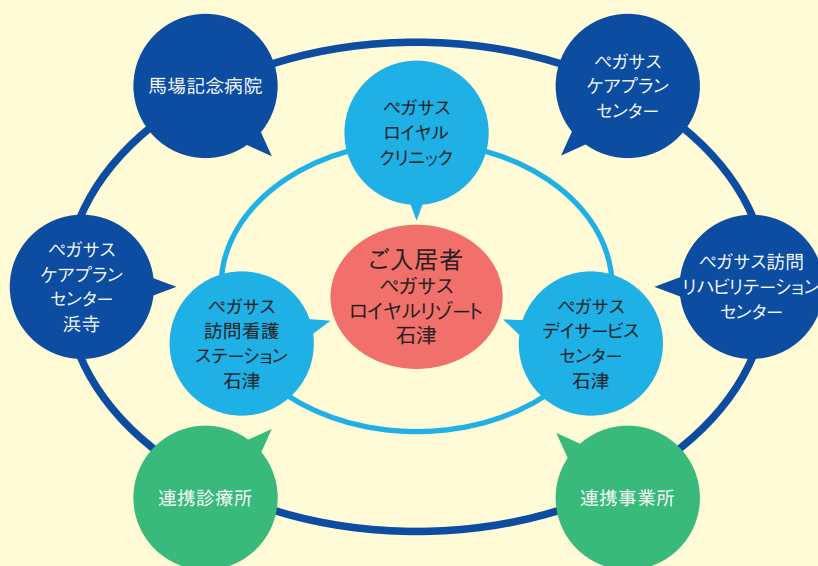


介護福祉スタッフに支えられている。朝、最初に訪れるのは、ユニコ訪問介護ステーションの介護福祉士の森弘匡である。「おはようございませす。お変わりありませんか」。Aさんのベッドサイドに行くと、視線が合うように体をかがめて、少し耳が遠いAさんにわかるように大きな声で話しかける。「世話をする側される側ではなく、入居者の方と一緒に

歩いていきたい」と語る森はAさんの体調を気遣いながら、いつものように朝の身支度やおむつ交換などのお世話をしていた。

このように介護を担当する森のほか、1階にあるペガサス訪問看護ステーション石津の訪問看護師、日常生活をお世話する管理室の職員、ペガサスロイヤルクリニックの中林医師と看護師、さらにペガサス訪問リハ

ペガサスロイヤルリゾート石津のサポート体制(図)



ビリテーションの理学療法士やペガサスケアプランセンターのケアマネジャーなどが入れ替わり立ち替わりAさん宅を訪れ、快適に安全に日々を過ごせるよう支えている。

介護度の高い方を「独り」にさせないサポート体制。

Aさんの日々を見守るスタッフたちは、Aさん宅に用意された「連絡ノート」で血圧や体温、排尿・排便などの健康情報を共有し、何か異変に気づいた場合は互いに連絡を取り合う。「たとえば、食欲の変化など、気になることがあれば、すぐ中林先生に相談しています。的確なアドバイスをいただけるので安心です」と森は言う。

馬場病院から赴任してきた中林医師は、入院中も主治医としてAさんを診てきた。その経緯もあり、Aさんも全幅の信頼を寄せている。「食事のコントロールが必要な方なので、栄養管理に気をつけています。また、医療面の管理とは別に、精神面のサポートにも力を入れていきます。ベッドでの生活が長くなると、どうしても気持ちが落ち込みます。そこで、お会いするたびにいろいろ世

間話をして、ふさぎ込むことがないようにに心配りしています」。

病院の4人部屋と違い、独り静かに療養できる環境が合っていたのか、Aさんの病状はとても安定している。入院中とは違い、表情はイキイキと輝き、ヘアスタイルなど身なりにも気遣うようになった。面会に訪れたMSWにも、「ここはいいよ」と笑みを浮かべる。あきらめていた在宅生活の夢を実現した喜びが、Aさんの心に生きる力を与えているようだ。

「高齢者の独り暮らしは、とにかく孤立しがちだ。気がつけば、2日も3日も誰とも会わないケースもあると聞く。介護度が高ければ、なおさらだろう。しかし、ここには入居されるすべての方を「独り」にしな

い手厚いサポートがある。「要介護であっても、自分の家で暮らしたい」という方にとって、医療・介護・福祉のサポートの万全な「在宅」という形があれば、大きな選択肢の一つとなるだろう。

知人の多い土地で暮らし続けることを選択したBさんのケース。

「いやあ、参りました」。将棋盤を前にして苦笑するのは、MSWの寺内である。場所は、ペガサスロイヤルリゾート石津1階の集会所。寺内を打ち負かしたのは、入居者のBさん（70代の男性）だ。その明るい笑顔をしながら、「本当に良かった」

と寺内は安堵した。

Bさんはもともと心不全を思い、大阪府内の病院へ救急搬送され、急性期を脱した後、ペガサスリハビリテーション病院へ入院した。その後、リハビリは順調に進み、退院後の暮らしの相談を寺内が担当することになった。Bさんの息子さんは遠方で暮らしており、退院後はそちらの施設への入居を希望していた。Bさん自身はできれば知人の多い大阪で暮らしたいが、病状が悪くなったときのことを考えると不安が募った。

迷い、悩み、なかなか結論の出せないBさんに寺内が提案したのが、「ペガサスロイヤルリゾート石津に体験入居」することだった。「今後の生活の場所を悩んでおられるなかで、次のステップに進むまでの準備の場所としてご利用いただけたらと考えました」。寺内の案内で住宅を見学したBさんは、病院でも施設でもないという高専賃の環境が気に入って、即座に入居を決意した。

入居される方々の日常生活をお世話する管理職員の存在。

体験入居にあたって、寺内はBさんの病状について詳しく申し送りを





した。Bさんは入院中、夜間などに胸が苦しくなることがあったからだ。ペガサスロイヤルリゾート石津・管理室の責任者、高橋伸行は振り返る。「当初は体調が心配でしたね。当直スタッフも含め、みんなで見守るようにしました」。

高橋は主に、入居されている方の

日常生活をお手伝いしている。電話応対などの管理業務の傍ら、「通販で届いた商品を返品したい」「お弁当を注文したい」など、こまごまとした要望に気持ちよく対応している。昼間、各戸の緊急呼び出しコールが鳴ると、真っ先に駆けつけるのも高橋だ。

「いろいろお手伝いさせていただいていますが、いちばんは話し相手になることです」と高橋は照れ笑いを浮かべる。1階のエントランスには、リビングセットが置いてある。「ちょうど話を聞いてほしいんやけど」という方を案内し、じっくり話し込むこともしばしばだ。話は生い立ちのこと、家族のこと、趣味のこと、さまざまな方面におよぶ。高橋は相づちを打ちながら、人生の大先輩の話を耳を傾ける。祖父母と孫ほど年齢が離れているせいか、入居者の方々は親しみを込めて「高橋君」と呼んでいる。

深夜、馬場記念病院へ 救急搬送されたことも。

Bさんの生活を医療面から支えているのは、中林医師である。「最初は脚のむくみ、ふらつき、息切れない

どがありました。まずは薬の内容を再調整し、様子をみました。その後、だんだん脚のむくみも取れ、歩いても息切れすることがなくなりました」。

もともと社交的なBさんは元気になるにつれ、行動範囲も広がり、近所の飲食店へも知人の輪を広げるようになった。ただ1度だけ、入居間もない頃、夜中に緊急呼び出しコールを押したことがある。駆けつけた当直スタッフの判断で、すぐに馬場記念病院へ搬送され、診療を受けた。病名は気管支炎。点滴治療が行われ、大事をとって数日間入院した。

ペガサスロイヤルリゾート石津と馬場記念病院は、車で5分ほどの近い距離にある。入居された方の病状が急変した場合は、1年365日24時間、馬場記念病院がバックアップする。初期診療と急変時の対応の2本柱で健康管理する万全の体制だ。

体験入居の間、寺内は今後の生活を相談するために、何度となくBさん宅へ足を運んだ。「息子のところへ行こうか、自宅に戻ろうか」と、何度も心が揺らいだBさんだったが、最終的には笑いながら寺内にこう語った。「居心地が良くなったから、ここで暮らしていくわ」。周

りに友人や知人を得て、Bさんはいま活動的な毎日を謳歌している。

高次脳機能障害の残る Cさんの リハビリテーション入居 (2週間)のケース。

もう一つ、ペガサスロイヤルリゾート石津に入居された方のケースを追ってみよう。

Cさんは、くも膜下血腫で馬場記念病院へ救急搬送された40代の男性である。急性期から回復期へ治療が進むなか、MSWの丸山秀幸（馬

「要支援」と「要介護」の認定

介護保険のサービスを利用するには、要介護・要支援の認定を受けることが必要となる。認定は介護認定審査会の審査判定に基づいて行われ、介護の必要度に応じて、要支援1～2から要介護1～5までの7段階に区分される。要支援1～2では介護予防サービス、要介護1～5では居宅サービスや施設サービスなどが受けられ、介護度が重くなるほど受けられるサービスも増えていく。



場記念病院・医療福祉相談室副主任）が退院支援などを担当することになった。

Cさんは後遺症として、脳の損傷により記憶や判断に障害が出る「高次脳機能障害」が残っていた。家庭の事情から退院後は独りで暮らしことになったが、即座に独り暮らしを始めるには不安が大きかった。まだ若いCさんにとって「一日も早く社会復帰したい」というのは当然の願いであり、丸山はなんとかCさんの願いを叶えたいと考えていた。

タイミングよく、ペガサスロイヤルリゾート石津がまもなくオープンする。そこで丸山はCさんに「安心できる環境で、独り暮らしのリハビリテーションをしてみませんか」と持ちかけた。「キッチンやバス、トイレの整ったワンルームで、家事や買い物など普段の生活に慣れていただこうと思ったんです。幸い、こちらを見学して気に入られ、すぐに入居が決まりました」。

スーパーに同行し、 買い物をサポートする。

Cさんは特に運動機能において障害はないが、記憶障害が残る。丸山はペガサスロイヤルリゾート石津のスタッフに「外へ出かけるときなどに、声かけして見守ってほしい」旨を伝えた。丸山自身もCさんの状態を評価し、次のステップについて相談するため、足を運んだ。近所のスーパーへ同行したり、出納帳でお金の管理ができるようにサポートした。Cさんはほどなく家事全般をこなせるまで回復し、時間を持て余すようになり、社会復帰への意欲もいっそう高まった。

2週間の自炊生活で少しふくら

したCさんはいま、一般のマンションへ引越し、就労移行支援事務所に通所しながら、職場体験等を通して就職をめざしている。現在もCさんは、馬場記念病院の外来を定期的に受診しているが、その都度、丸山は面接し、必要な支援を提供している。

リハビリテーション入居を はじめ、 幅広いニーズに添えていく。

Cさんのような場合、ペガサスロイヤルリゾート石津はかつこの「リハビリテーション施設」となる。丸山はリハビリ入居のメリットを確信す

るとともに、MSWの仕事の広がりにも大きな手応えを感じているという。「今までは病院の中で仕事が終わっていました。ペガサスロイヤルリゾート石津では退院後も継続して支援できます。生活の場へ入っていくことにより視野も広がり、やりがいを感じています」。丸山の意見に、寺内も大きくうなずく。「今後は、たとえば病院や施設に入院・入所が決まるまでの待機の間所として使うなど、さらにいろんなご利用方法を提案したいと考えています」。

患者さまのニーズに合わせ、高専質という新しい受け皿をいかに活用していくか。MSWたちは手探りで、その可能性を掘り進めている。



社会医療法人がつくる高専賃とは？ 試行錯誤のなかで、理想のカタチを追い求めていく。

退院後の新しい受け皿として機能し始めたペガサスロイヤルリゾート石津。

しかし、ペガサスの狙いは法人内だけでなく、地域全体の受け皿として活用を広げることにある。

「ペガサスの高専賃」の良さをどうやって地域の人々に伝え、理解してもらえばいいのか。ここに、もう一つの大きな課題があった。

高専賃って何？

あまり知られていない

新しい選択肢を紹介する。

も、オープン前から募集広告をはじめ、精力的に見学会を開催してきましたので、ペガサスロイヤルリゾート石津の知名度自体は向上してきています」。

地域の方々へのPR活動などに奮闘しているのは、ペガサスロイヤルリゾート石津のプロジェクトチームに参加する職員たちだ。その一人、社会医療法人ペガサス・法人本部経理部課長代理の柳野和彦は言う。二般的に高専賃は、まだあまり認知されていません。PR活動では、まずは高専賃についてご説明し、そのうえで「ペガサスの高専賃」の良さをいかに伝えるか。そこが苦心する点です。きちんとペガサスの特色を、ご理解いただきたいですからね。で

高専賃は近年急速に増えてきた、新しい住まいである。本誌冒頭に登場した田中恭子は、有料老人ホームとの違いについてこんなふうに説明する。「有料老人ホームは厚生労働省の管轄で、老人福祉法に基づく施設です。それに対し、高専賃はもとと高齢者の賃貸住宅を増やすために国土交通省が進めている事業です。そのため、高専賃は設備や付帯サービスなどの条件がなく、ひとくちに高専賃といっても多様な住居があり、言わば玉石混濁の状態

なのです」。

「ペガサスの高専賃」の良さは、もちろんその手厚い医療・介護・福祉サービスにある。「一般の高専賃では他の医療機関などと提携を結ぶスタイルが多いようですが、ペガサスは病院や事業所が直結しています。万が一のときは馬場記念病院が全面的にバックアップでき、法人内で居宅介護・看護を支援できます。さまざまな職員が日々密接に関わり、生活を



支えているところは自信をもってご案内できます」と柳野は胸を張る。

「ペガサスを信頼して、入居してくださった方ばかりです。その信頼を裏切るわけにはいきません。新しい事業だけに、ペガサスロイヤルリゾート石津の職員は言うまでもなく、病院・事業所、また、専門や部署を問わず、法人全体からさまざまな職種の職員が関わっています。正直に言えば、その分、職員には負担をかけていますが、利益を求めないギリギリの料金設定のもと、社会医療法人としてより良いサービスを提供したい」と田中は舞台裏の苦労をもらした。

もう一人、入居者の募集を担当



する井上敦雄（社会医療法人ペガサス・法人本部経理部）は言う。「以前、介護型のケアハウスに住んでいた方でも、ここでは安心して暮らしておられます。さまざまなニーズに応えられることをもつと伝えていきたいですね」。

7月25日、 雨上がりの石津で 納涼祭が行われた。

さまざまな職員がそれぞれの立場で、高専賃事業に取り組むなか、7月25日の土曜日、ペガサスロイヤルリゾート石津で初めての大掛かりなイベント「納涼祭」が開催された。

その日、石津周辺は朝から曇り空が広がり、正午前には激しい雨となった。しかし、職員の思いが天に通じたのか、開催予定の3時頃には雨も上がり、ご近所からは家族連れのお客さまも訪れた。中庭から急きょガレージに移した会場では、

焼きそば、フランクフルト、ジュース、お好み焼き、おでんなどのお店が並んだ。

入居する方々は一人、また一人エレベーターから降りて、職員の介助を受けながらお祭り会場の賑わいのなかへ入っていく。デイサービスセンター石津で行われたビンゴ大会では、ペガサスからのプレゼントも用意され、会場いっばいに歓声が沸いた。

ご近所へのお披露目と ご入居者の方々の 親睦を兼ねて。

この納涼祭を開催した背景について、イベント責任者の原田佳子（馬場記念病院・地域医療支援室課長代理）は語る。「一つは、入居されている方同士が交流を深めるきっかけづくりですね。事前に、祭の準備を手伝っていただくなど、入居される方々にも積極的に参加していただきました。もう一つは、ご近所へ



のお披露目です。多くの来場者に対応するため、法人内で職員ボランティアを募ったところ、すぐに50人も集まりました。こういうところがペガサスの良さですし、心強く感じましたね」。会場を見渡せば、あちこちに職員ボランティアの笑顔や呼び声があふれている。このマンパワーこそがペガサスグループの強みと言えるだろう。

このほか日常的なイベントとして、毎週水曜日に「茶話会」「貼り絵づくり」「ビデオ上映会」「ガーデニングを楽しむ会」などが開催され、不定期ではあるが、中林医師による「健康講座」なども行われている。また、1階のペガサスデイサービスセンター石津を利用し、リハビリテーションにいそしんだり、交流を楽しむ入居者の方々も多い。レクリエーションの機会は多彩に用意されている。

次の挑戦は、 新型老健の開設。

ペガサス初の高専賃事業に続いて、今秋には介護療養型老人保健施設「ペルセウス」のオープンも予定されている。



ペルセウスの開設準備を進める社会医療法人ペガサス・法人本部係長の中辻朋博は言う。「平成23年度末には介護保険が適用される療養型医療施設が廃止されます。そのため、現行のペガサスリハビリテーション病院の介護型療養病床を引き継ぐ形で開設されるのが、ペルセウスで



介護療養型医療施設の廃止は、医療・介護費の抑制をめざす国の方針で決められたもの。介護療養型老健は「介護型療養病床」でも「介護老人保健施設」でもなく、医療サービスの充実が特徴である。中辻はこう説明する。「頻回なたんの吸引の必要な方、胃に人工的な小さな孔をあけ、栄養を摂っている方など、一定の医療管理の必要な方に入っていたく予定です。また、老健は原則として次の施設入居や在宅復帰までの施設としてご利用いただくものです。『通過施設』という老健本来の姿を追求し、リハビリテーションに力を入れ、皆さまの在宅復帰をしっかりと支援していく方針です」。

ベルセウスの経験を活かし、来年には2つ目の介護療養型老人保健施設が開設される予定だ。社会医療法人ベガスは医療から介護・福祉領域へと大きく翼を広げていくとしている。

救急医療を中心に行う社会医療法人として、
退院後の安心な暮らしを用意していきたい。

社会医療法人ペガサス 理事長（馬場記念病院 院長）
馬場武彦

事業展開の 根底にある思い。

急性期医療を主体とするペガサスが、患者さまの退院支援や在宅療養に力を注ぐのにはどんな理由があるのだろう。社会医療法人ペガサス理事長の馬場武彦に聞いた。

「誤解を恐れずに言えば、すべての発想の出発点は、救急医療なんです。馬場記念病院では常に満床に近い状態で、一人でも多くの救急患者さまを受け入れるために四苦八苦しています。救急医療を手厚くするには、急性期を脱した患者さまの次のステージを確保しなくてはなりません。そのため、私たちはこれまで救急から回復期、在宅への切れ目のないサービスの流れを構築してきましたし、今回の高専賃もそ



の一環と位置づけています」。

では、ペガサスが追求する高専賃とはどんな住宅か。「私たちは社会医療法人ですから、いわゆる「箱もの」を作った後の方が本業です。日々の医療・介護サービスや病状が急変したときの馬場記念病院との有機的なつながりなど、ペガサスならではのサービスを提供できる強みがあります」。高専賃を手がける事業主は、マンションディベロッパーや一般企業など多種多様である。そのなかで、社会医療法人だからこそ提供できる上質なサービスに馬場は強くこだわっている。



いち早く介護型療養病床から 介護療養型老健への 転換を決断。

今秋、介護療養型老人保健施設「ベルセウス」がオープンするなど、馬場は介護型療養病床から介護療養型老健への転換をいち早く決断した。その根底にも、「救急から回復期、在宅への流れを充実させようとする目的がある」と馬場は言う。

「病院から施設に転換するわけですが、医療と介護を線引きする



のではありません。必要な医療サービスを継続しつつ、介護度の高い方に入っていたく施設であり、在宅復帰に至る過程を支える中間施設という位置づけです。その意味では従来の老健とは全然違うもの、むしろいまの介護療養型医療施設に介護サービスを充実させたものになるのではないかと考えています」。

また、ベルセウスがもたらす波及的効果として、馬場は「アメニティの向上」を挙げる。「ベルセウスはベッドをゆったり配置しやすから、より快適な療養環境を提供できます。同時に、施設が増える分だけ、これまで手狭だった馬場記念病院のアメニティも改善できます。急性期病床や回復期リハ



ビリテーション病床も含めた大きな再編を図り、より患者さまにご満足いただける環境を整えたいと考えています」。

最後に、今後、ペガサスがめざす目標を聞いてみた。「基本は、この地域に、あるいは私たち法人に、何が欠けているか、を常に考えていくことです。いまは発想にないものでも、今後は取り組んでいくかもしれません。そして将来的には、ほかの病院や施設とも連携しながら、医療・介護・福祉をカバーする地域ネットワークを構築していきたいと考えています」。地域全体を見据えた大きなビジョンに向けて、馬場は今後も果敢にチャレンジしていこうとしている。

Pegasus Tsubasa

special
2

医療から、そして看護、介護から。 地域社会を支える人々。

ペガサスは、地域の診療所、
そして、看護、介護に関連する事業所と、連携を行っています。
診療所は、地域の皆さまにとって、医療を受ける「最初の窓口」。
丁寧な診察による適切な診断・治療を行い、また、病院の紹介を通して、
患者さまの「かかりつけ医」として、健康状態を総合的に管理してくれます。
看護、介護に関連する事業所は、在宅で療養する皆さまの「パートナー」。
ご本人はもちろん、ご家族の毎日を支えたり、
快適な生活の場そのもののご提供により、皆さまを支援します。
special 2では、こうした診療所、事業所をご紹介します。

※ 診療所（アイウエオ順）そして事業所の順でご紹介しています。

ス

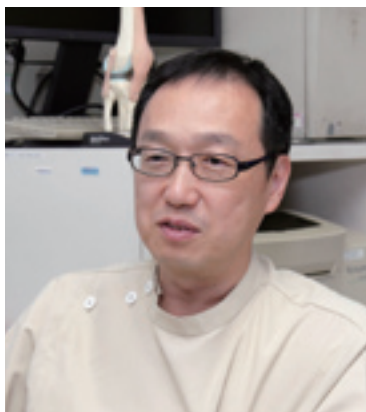
ポーツ障害治療をはじめ、あらゆる
整形外科疾患に対応し、地域医療に貢献。

診療所

安心して医療が受けられる
環境をつくるために。

● 会話とスキンシップ
を重視し、患者さまに
「安心感」を与える診療を。

南海本線堺駅の近くにある「お
ので整形外科」。院長の斧出安弘医
師は、昭和56年に川崎医科大学を
卒業後、大阪市立大学医学部整形
外科学教室に入局し、主に人工関
節置換術を学んだ。その後、関連
病院で外傷学を学び、平成12年12
月に現在の場所に開業した。「オー
ルマイティーな整形外科医をめざし
て学んできたことが、現在、開業医
としてとても活かされていますね」。
診療所を開設して9年。院長が診
療の際に心がけていることは、患者
さまに「安心感」を与えることだ。
「会話とスキンシップを大切にしてい
ます。たとえば、手を優しくさすつ
てあげることだけでも、患者さまに
は大きな安心となります。安心感
をもっていたことで、積極的に
症状を訴えてくださり、診断が容
易になります」。診療所に入ったビ
ル前には、院長自らが整備している
堺市の花壇がある。現在、院長は



その花壇でゴーヤなどを栽培し、患
者さまとのコミュニケーションを図つて
いる。「患者さまが花壇について診
察時に話してくれる。とてもうれし
いですね」。

診断により、患者さまを最適な
治療へと、確実に誘導するのも診療
所として重要な仕事だ。特に馬場
記念病院の整形外科とは密な連携
関係にあり、多くの患者さまを紹介
している。「検査、手術はもちろん、
術後管理やリハビリテーションもきつ
ちりしていますし、対応が早いので
安心です」。

院長の下には、一日に約120人
もの患者さまが訪れる。これは、院
長が地域に愛され、患者さまから
絶大な信頼を得ているなによりもの
証である。

● スポーツ選手の心身を 考慮し、スポーツ障害の 治療・予防に努める。

おので整形外科は、オリコン・エンタテインメント出版「患者が決めたーい病院」2007年度版の「スポーツ障害」の項目で、近畿圏で9位にランク付けされた実績を持つ。日本整形外科学会認定・日本医師会認定のスポーツ医としての資格を持つ院長は、スポーツクラブや各種スポーツ大会などのチームドクターや救護班としても活躍。スポーツによる外傷やスポーツ障害の予防・治療を行い、その技術の高さと人柄で、現在でも有名なオリンピック選手やプロスポーツ選手が院長を頼って診療所を訪れる。「私自身も空手道場の師範としてスポーツをしていますので、怪我をして、次の試合に出られない悔しさなど、スポーツ選手の気持ち

がよくわかります。そういった患者さまの精神状態を考慮し、治療を行うことが大切ですね」。院長が過去に治療を施した患者さまが、オリンピック選手や、プロ選手として活躍している。「これほど嬉しいことはないですね」と院長は、はにかみながら優しく微笑んだ。今日も多くの患者さまが院長の人柄と安心をもとめて診療所を訪れる。院長の一日は患者さまとの笑顔で溢れているに違いない。



おので整形外科

院長：斧出安弘
住所：堺市堺区竜神橋 2-1-5 第5中西ビル 1F
TEL：072-225-0220
診療科：整形外科、リハビリテーション科

腎

臓疾患から多くの患者さまを救うために、 地域連携を拡大し腎臓病予防に努める。

診療所

地域の腎臓専門医として、
その使命を果たすために。

● 慢性腎臓疾患予防に 取り組む、 地域医療に貢献する。

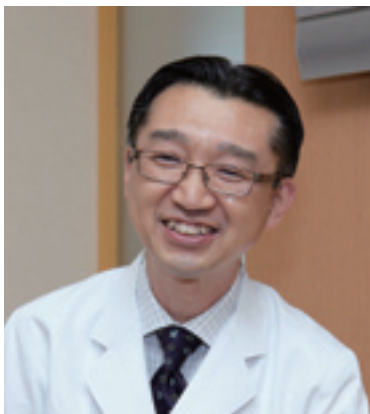
柿原昌弘院長が堺市で仕事を
するようになって17年。腎臓専門医と

して大阪労災病院に勤め、その後、浜寺中央病院の院長・腎センター長を経て、今年の1月に柿原クリニックを開業した。「慢性腎臓病の患者さまは全国に400万人いるとされ、この地域にはおそらく数千人と、腎臓病の患者さまがいる。しかし、

腎臓専門医は全国的に数が少なく、堺市内においてはほとんどいません。長年お世話になってきたこの地域で、腎臓病患者さまを助けたいと思い開業しました」。

慢性腎臓疾患は痛みなどの症状がなく、気付かないうちに病状が進行するケースが多い。院長は、地域の開業医と腎臓病の研究会などを定期的に開催し、各診療所を通して、地域住民への腎臓病予防活動を行っている。「腎臓障害の主な原因は、高血圧と糖尿病です。そうした患者さまを早期発見し、予防治療を行うことが私の使命です。ただ、腎臓専門医と専門外医師との連携はまだ充分とはいえず、慢性腎臓病を防ぐには、連携拡大が必要です」。

また柿原クリニックでは、腎臓病を早期発見するためにスタッフ教育にも力を入れ、クリニック全体で的確な診断ができる体制をとっている。



「看護師、検査技師、栄養士など全スタッフが腎臓病の知識をしっかりと身につけ、スタッフ全員の目で腎臓病を見逃さないようにしています」。

● 24時間365日、 常に緊急時に備え、 医師としての役目を果たす。

「患者さまには常に家族を診る気持ちで診療を行っています。患者さまと対等な関係で充分に話し合う。そうすることで見落としのない的確な診療を行うことができます。そして、専門的な検査・治療が必要な患者さまは最適な病院を紹介する。特に馬場記念病院には、脳疾患、神経系疾患、消化器系疾患などの患者さまをお願いしています。私自身も馬場記念病院に週に一回、腎臓専門医として診療させていただき、理想的な病診連携のカチを実現させています」。

そう語る院長に休みはない。ゴールデンウィーク、お盆、正月休みもクリニックにいる。診療時間が終わった後や休日には常にオン・コールの状態です。いつでも緊急に対応できる準備をしている。「人工透析の患者さまは病状が急変することもあり、患者さまに時間は関係ないですし、いざというときにはしっかりと対応できるように準備しておくことは、医師

として当たり前のことですから」と院長。その表情に疲れの色は無く、優しい笑顔が満面に広がっていた。24時間365日、院長は常に患者さまのことを考えている。



柿原クリニック

院長：柿原昌弘
住所：堺市西区浜寺公園町 1-12-10
TEL：072-263-3713
診療科：内科、腎臓内科、人工透析

地域の方々、医療・福祉機関との関係を大切にし、サービスの質の向上を追求する。

事業所

ご利用者の尊厳を守り、心に寄り添うサービスを提供。

● ご利用の方が、本当に満足できるサービスを提供するために。

社団法人堺市医師会の介護老人保健施設「いずみの郷」は、泉北ニュータウン近くに位置し、周囲を豊かな緑に囲まれた閑静な環境にある。施設に入って目に飛び込むのは、太陽光が大きな窓から降り注ぐ広い空間のなかで、ご入所者とそのご家族が一つのテーブルを囲んで談笑している姿。そして、窓の向こうには、目を洗われるような中庭の鮮やかな緑と大きな池が見える。まるで時間が止まったかのような、ゆったりと落ち着いた空間がとも心地よい。「ここは堺市から都



市景観賞をもらっています。こうした環境は、ご利用者に癒しを与え、ゆったりと過ごしていただくことができる。スタッフにとってもいい環境ですね」。丸毛俊明施設長はそう言々と優しい笑みを浮かべた。もちろん利用者の満足は環境だけでは成り立たない。スタッフの介護に対する熱い思いがこの施設を支えている。「介護は人が行うものですから、

いくら環境が素晴らしくても人がしつかりしていないと意味がありません。高齢者の方は人生の大先輩であり、尊敬の念をもつて接する。必ずお名前でお呼びし、目線を合わせて会話をします。心に寄り添う気持ちでお世話をします。これを徹底し、利用者の方々が本当に満足できるサービスを提供できるよう常に努めています」。

● 地域の方々と共生する施設として地域密着に力を入れる。

「ここは地域の皆さまのための施設です。だから地域の方々と共生できる施設でなければ意味がありません」と、施設長は力強く言う。いずみの郷では、地域の会合などへの積極的な参加をはじめ、地域の方々との交流を行い、地域密着にも力を入れている。こうした活動は、市町村自治体や各種事業者、地域の保健・医療・福祉機関との連携強化・拡大にも繋がる。「ご利用者により満足していただくには、各スタッフが連携してサービスを提供するチームケアが必要です。それと同じように、地域においてもそれぞれの機関が一つのチームとして医療・介護サービスを提供する。地域一体となったケアを積極的に行うことは、ご利用者にとって、より満足度の高

いサービスが提供できることだと思っています」。

施設長が馬場記念病院について要望することは、「ご利用者を搬送する際、病院玄関までの道にタクシーが並んでいると、車を止めにいくとかがある。物理的なことになりませんが、何とかしていただけるとありがたいですね」。サービスの質の向上を徹底的に追求している施設長だからこそ、連携病院に対しての要望は高い。先の言葉には、地域医療に早くから取り組んできた馬場記念病院だからこそ、要求できる期待の高さが表れている。「すべてはご利用者の笑顔のためですから」。施設長はそう言い切った。



社団法人堺市医師会 介護老人保健施設 いずみの郷

施設長：丸毛俊明
住所：堺市南区竹城台1丁目8番2号
TEL：072-290-2277
事業内容：介護老人保健施設、ケアプランセンター、老人介護支援センター

Pegasus Tsubasa

医療が変わります。 ペガサスも変わります。

地域医療を取り巻く環境は、変わり続けています。

その変化を見つめて、ペガサスでは、馬場記念病院を中心に、さまざまな取り組みを行っています。その取り組みの目的や方向性、また、皆さまにご理解いただきたい点をお伝えします。



ずっと「あなた」を支えたい、
ペガサスロイヤルリゾート石津。
ハード面をご紹介します。

社会医療法人ペガサスの、ペガサスロイヤルリゾート石津は、おひとり暮らしの方にとって十分な広さ、かつムダのない間取りとなっています。

各室は、木目を基調とした落ち着いた雰囲気の色づかい。また、24時間の職員常駐をはじめ、いずれのお部屋も緊急呼び出しコールの設置、キッチンはおール電化、車イスでも使用できるトイレ、独立型のお風呂など、安全・安心、そして快適な毎日をお過ごしいただけます。また、防音性にも優れていますから、

隣室の方に遠慮することなく、ベッドと一緒に暮らしていただけます。

ペガサスロイヤルリゾート石津は、「賃貸」というカタチの住宅でありながら、いつでも必要なときに医療・介護サービスをとお受けいただくことができる、在宅の新しい選択肢。「すべては医療の視点から」あなたを見つめ続ける、ペガサスから地域の皆さまへの新しい提案です。

ペガサスロイヤルリゾート石津概要

●所在地／大阪府堺市西区浜寺石津町東1-3-31

●居室面積／25.00㎡～25.20㎡

●居室設備／オール電化、バス・トイレ・パレット 緊急呼び出しコール、洗面台ほか
●共同設備／介護浴室、洗濯室、集会所、談話スペースほか



ペガサスロイヤルリゾート石津外観



室内



オール電化キッチン



介助浴室



介護療養型老人保健施設
ベルセウス外観（工事中）

「ペガサスロイヤルリゾート石津」に関するお問い合わせ、ご相談、お申し込みフリーダイヤル
0120-565878（9時～18時）

各フロアに
機能訓練スペース設置の
「ベルセウス」です。

介護療養型老人保健施設ベルセウス（平成21年10月1日開設）は、4人部屋中心で定員は92名です。建物は5階建てで、各フロアには食堂、談話室を設置。また、理学療法士や作業療法士によるリハビリテーションをお受けいただけます。機能訓練スペースを設けています。

地域医療を考えるペガサス情報誌



発行人 馬場武彦
編集長 立永浩一
編集 ペガサス広報委員会 編集グループ
編集協力 HIPコーポレーション
発行 社会医療法人ペガサス 〒592-8555 大阪府堺市西区浜寺船尾町東4-244
TEL 072-265-5558 <http://www.pegasus.or.jp/>

本誌は再生紙100%を使用しています。

special 1 病気を抱えたり、身体が不自由な高齢者を「独り」にしないためのペガサスの新しい挑戦

special 2 医療から、そして看護、介護から。地域社会を支える人々。

※記事の制作にあたり、患者さまや診療所の先生方、事業所の方々にご協力いただき、心から御礼申し上げます。

BHI 賞グランプリ獲得

表紙のBHIマークは、ペガサス情報誌「つばさ」（22～25号）が、第7回ヘルスケア情報誌コンクール（BHI賞）においてグランプリを獲得し、主催者であるNPO法人日本HIS研究センターから贈呈されたものです。



私たちペガサスは、

社会医療法人としての使命を果たすために、

救急医療・急性期医療のさらなる高度化に力を入れています。

そしてその一方で、回復期医療・慢性期医療、

そして在宅への円滑な連携に、長い月日をかけ取り組んでいます。

今また、在宅の選択肢のひとつとして、

高齢者専用賃貸住宅を開設しました。

その背景には、医療・介護・福祉制度の狭間を、少しでも繋ぎたい、
そうしたい思いが注ぎ込められています。

このペガサスの高齢者専用賃貸住宅が、満点かどうか…
答えはまだ出ていません。

おそらく不十分などころもあるでしょう。

しかしそれでも、私たちは一步を踏み出しました。

「すべては医療の視点から」しっかりと捉え、

病気を抱えたり、身体が不自由な高齢者の方々を、

「決して独りにしない」。

そんな思いの職員たちの奮闘努力で、一日一日を刻んでいます。

職員たちにとつて、負担が大きいのは事実です。

それでも、それが社会医療法人としての責任である。

そして、それがペガサスである。

私たちペガサスは、

地域の方々が抱えるさまざまな問題点を、

常に皆さまと一緒に見つめ、考え、挑戦を続けていきます。

社会医療法人ペガサス 理事長 馬場武彦



社会医療法人

ペガサス